「三宝通信」法話

浄土宗 天上山 大念寺
住職 大島 祥明

二千件を越す葬儀によって、死者の霊を実感する

私は、昭和五十五年（一九八〇年）から平成三年（一九九一年）にいたる十一年余の間に、実に**二千四十六名にわたる葬儀**を執り行わせていただきました。その多くは葬儀社からの依頼によるものでしたが、ほとんど毎日が、通夜に葬儀という日々でした。このことを通して、私は実に特異な体験をすることができました。

それは、亡くなった方、すなわち**「死者の霊」**についての体験です。

死後、人は無に帰すのでしょうか。あるいは、霊魂として存在しつづけるのでしょうか。

そもそも霊魂があるのかということは、「信じる」か「信じない」かの問題だと一般的に思われています。

けれども私にとって、霊魂は、**「たしかに実在するもの」**なのです。これは宗教的な確信や信仰の問題なのではなくて、私にはたしかに**「在る」**あるいは**「いる」**ということが実感としてわかるからです。

一般的に言われている「霊」はたしかに実在するのです。私は、これを**「本人」**とよんでおります（仏教的には「仏性」と言うのでしょうが…）。

その「本人」を、わかる方もいますし、わからない方もいます。そして私には「わかる」し、「実感できる」のです。二千件を越す葬儀の体験によって、私は霊の実在を確信するようになったのです。

私にとっては、霊が「在る」のは、もう前提であり、「わかるか、わからないか」「実感できるか、実感できないか」なのです。

次回は**「霊が〈わかる〉とはどういうことなのか」**についてお話し致します。